

Title	ヒーシオドスの「エルガ」
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.8 (1924. 8) ,p.1117(53)- 1122(58)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240801-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜 録

ヒーシオドスの「エルガ」

高橋 誠 一 郎

希臘人の經濟思想を傳へんとする者は屢々其の筆をヒーシオドス (*Hesiodos*) に起す。(例へば John Kells Ingram の *A History of Political Economy*, ed. 1907, p. 11, 及び Albert Augustus Trever の *A History of Greek Economic Thought*, 1916, p. 14 の如き)。而も斷片的なる希臘人の經濟思想、殊に經濟上の問題に對して僅かに偶發的暗示を與ふるに過ぎざるプラトーン以前の現存文獻中に於て此の希臘最古の叙事詩人の詩篇に就いて記述す可きことは固より多くはない。

ヒーシオドスの人物はホミロースの其れの如く多く問題とせられてゐない。蓋し後者の作、イリアドス及びオデイシウス中には毫も作家自身に關する記述を看出し得ざるに反し (オデイシウス中に現る、盲樂人デイモドオコス *Demodochos* に於てホミロース自身の面影を認め得るに非ざれば——*Od. viii. 264*)、ヒーシオドスは其の詩篇中に於て自己の名を呼び、自己の父及び弟に就いて物語り、而して自己の人世哲學を披瀝すること頗る多きが故である。然しながら彼の時代に關しては古代人すら明確なる意見を有してゐない。ヒーシオドスは彼れ及びホミロースの兩者を等しく紀元前八百五十年若しくは九百年の交に置き、ホミロースに先立つて彼れを記してゐる。彼れを以てホミロースを同時代人と做し、若しくは彼れよりも更らに古きものと做すの意見は其の外にも猶ほ存してゐる。而

も兩者の詩篇の内容より推してホーミロス其れはヒーシオドスの其れに比して古きものであることは疑ひなきが如くである。而して近代の學者は次第に彼れの時代を低下せしめて紀元前七百七十六年より起算せらるゝ四年期(Quartus)の始初、或ひは約七百三十五年、或ひは約七百年の頃に生存せるものと考ふるに至つた。

詩人自らの物語る所に據つて稽ふれば、彼れの父ダイオス(Dios)は小亞細亞なるイーオリス(Eolice)のキューミー(Κύμη)よりヘリコーン(Hērakon)山の北側なるピーオーシア(Boreotia)の Asra に移住せるものである。彼れは此の地を以て「冬いたましく、夏はみじめに、曾つて快きことなき」悪土と傲してゐる。(Erga, 640)。彼れと其の弟バーシース(Hērōtes)とは父の死後家産を分つたのであるが、バーシースは其の兄の財産を横領せんとし、法官に訴して

彼れは此處に二人の兄弟の客と爲つた。然るに彼れ等の姉妹クリムエニー(Κλυμένη)はヒーシオドスと同伴せる者の爲めに夜間凌辱せられたるを恥じて自ら縊れて死んだ。兄弟の者は犯人を殺害したるのみならず、ヒーシオドスを以て其の犯罪を黙過せるものと邪推し、彼れをも亦た殺害して其の死體を海に投じた。而もデルファイの神託の命ずる所に據つて、彼れの屍はオルコメナス(Olympus)に齎され、其の市場に彼れの紀念碑は建設せられた。彼れは古代に在つてはアイオーニア(Ionia)及びホーミロス派に對するピーオーシア及びロクライ派を代表するものと看做され、幾多の叙事詩は彼れの作として傳へられて居つた。傳説は彼れが歌競べに於てホーミロスに打勝つて三脚を贏ち得たることを主張する。

ヒーシオドスの名の下に傳存する詩篇は僅か

訴訟に勝利を占めた。然も彼れは奢侈の爲めに其の獲得せる配分を失ひ、ヒーシオドスを脅すに新たなる訴訟の提起を以てした。ヒーシオドスは裁判官を呼ぶに「賄賂を貪り食ふ諸君主(Bekhtars)」を以てしてゐる。蓋し君主は即ち法官たりしものである。(Erga, 38, 261)。是れが爲めに彼れはノーバクタス(Nabaktos)に移らんとした。傳説に従へば、彼れは其の將來の運命をデルファイの神託に諮ふた。巫尼は之れに答へてニームア(Neima)なるヂュース神殿の並樹に死は彼れを待つ可きが故に、是れを回避す可きことを以てした。アルゴス(Argos)にはヂュースの神殿と銅像が存してゐた。ヒーシオドスは之れを以て致命の場所と信じたるが故に其の道をロクライ(Loklai)人の町イーノイ(Oinoi)に取つた。而も此の地も亦た同一神を祀れるものであることを彼れは知らなかつた。

に「農仕事と吉凶日」(Ἡ ἔργα καὶ ἡμερῶν)、「諸神系圖」(Θεογονία)及び「ヘーキューリーズの楯」(Ἄστικ' Ἡρακλείδου)の三つである。最後のものが彼れよりも後の時代に屬することは疑ひなき所である。前二者と雖も吟行詩人及び後世の「ヒーシオドス流の詩人」によつて幾多の挿入を加へられたことは疑ふの餘地がない。第二世紀の旅行家にして地理學者たるポオセーニアス(Pausanias)に據れば「仕事と暦日」はピーオーシア人がヒーシオドスの唯一の眞作と看做したる所であると云ふ。

「仕事と暦日」は彼れの弟、即ち前述せる「最も暗愚なるバーシース」に寄言せられてゐる。詩人は、其の弟が奢侈不正の生活を送り懶惰饒舌を好んで廢滅の道を辿りつゝあるを救はんが爲めに彼れに與ふに幾多の嚴烈なる叱責を以てし、彼れに勸告するに其の不正なる所業を廢棄

し、誠實なる勞苦に由つて自己の爲めに新たな富を取得す可きことを以てしてゐる。彼れは「仕事は猶ほ一意其のもの、爲めに行はれ、而して其の結果が恵まれたる」黄金時代の消滅を痛歎してゐる。第二、第三、第四の時代も亦た消滅した。是れに次いで到れるものは痛ましき勞苦の黒鐵時代である。(即ちヒーシオドスは青銅時代を黒鐵時代の前に置くものである。Erga, 151.)

此の詩篇は彼れが如何に農耕及び舟行に興味を有したるかを物語る。彼れが其の弟に與へたる第一の忠告は耕作用の牛(Βόων ἀροτῶνα)を購ふに在つた。彼れは耕作用の牛を以て農民の世帯中、其の妻に次いで最も重要な地位を有するものと做してゐる。(Ibid., 405.) 農夫は自己の小舟を購ひて、其の産物を收受せんとする者の許に之れを輸送す可きである。(Ibid., 641.)

は希臘に於ける工業の發達を知る上に於て興味あるものである。(Ibid., 25f.)。ヒーシオドスはプロミーシウス(Προμύσιος)の盜火と最初の女性バンドーラ(Βανδώρα)の創造に由つて此の世に齎されたる總べての災厄と禍難とに就いて物語る。「陸も海も共に災殃を以て充されてゐる」と彼れは叫ぶ。而して彼れは不幸なる結果を回避す可き幾多の戒律を教示する。斯くて彼れは其の詩篇の最後の部分に於て一定の事項を行ふの吉日及び凶日に關する長き表を掲げてゐる。

希臘人は固と羊を牧し、土地を耕せるものであつて、私有財産と都市とは彼れ等に取つて未知のものであつた。而もホミロースの詩篇の成れる紀元前第九世紀の後半に於て、既に都市は其の存在を見、階級の分岐と社會の分裂とは生じつゝあつたのである。希臘の原始的社會状態は戦争と貿易と航海とに依つて覆されたるの觀

勞作は人が如何なる命數の下に在るとを問はず彼れに取つて最も幸福なる運命である。往々にして半ばは全部よりも以上である。富は詐欺的辯舌に依つて取得せらる可きものに非ずして、天の賜物として受領せらる可きものである。ヒーシオドスは肉體的勞働の高貴と重要とを強調し、勞働の生涯を以て永續的繁盛を得可き唯一の根元なりと主張する。(Ἐργον δὲ οὐδέν τι βουδός, ἀσπρὴν δὲ τὸ βουδός—ibid., 311; cf. 303-306, 308, 310, 314, 397 f., 413.)

ヒーシオドスは他方に於て彼れの時代の貪婪と不正とを痛罵する。洵に此の黒鐵時代に在つては貨幣は賤劣なる人間の生命である。彼れは人々の猜忌、鬭争、讒謗、訴訟を是れ事となるを非難する。「陶工は陶工と争ひ、大工は大工と争ひ、乞食は乞食を嫉み、詩人は詩人を嫉む」。彼れが同職の工匠間に於ける競争の事實を記せるがある。富に對する「渴想は所有階級を支配した。而して所有階級の貪欲に由つて先づ惱されなければならなかつたものは小農民であつた。彼れ等は其の財産を公賣せられ徴收せられて虐遇と隷屬との淵に沈んだ。而して正直なる判斷に依つて古昔の權利(Βεβαιότητες)の問題を決定するの權力は既述せるが如く、「賄賂を貪り食ふ君主」の手中に存したのである。是に於て乎不幸なる小農民たるヒーシオドスは、恰も mishpat を叫べるアモス以後のヘブル預言者に等しき語氣を以て、ジウス大神に向ひ其の雷霆を以て人界を打ち、其の女「正義」(Δίκη)を再び地上に送らんことを求めたのである。

洵にヒーシオドスの「仕事と暦日」は或る意味に於て後世の希臘文献に於ける *Economica* の先驅たると同時に、又た社會的正義と法律上の平等とを絶叫せる歐洲文献の最初のものであつ

た。

(一九二十四年七月稿)。

佛蘭西經濟學に於る

價值論の發達 (二)

津 田 誠 一

七

Anne Robert Jacque Turgot (1727-1781) の經濟學上に於る代表的著作は一七六六年脱稿、一七七〇年發刊の “Reflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses” なる事象評の一致する所なりと雖、其價值論に關する蘊奥を披瀝せるものとしては寧ろ同年代の執筆に係る未定稿 “Valeurs et Monnaies” を擧げざる可からず。顧るに前掲 Galiani に於ては使用價值と

d'après les Economistes anglais et Français, p. 373)。

彼れは先づ「鑑賞價值」則使用價值の性質の究明より出發する。以爲らく「凡そ諸般の貨物は吾人の享樂、吾人の欲望満足に適當すと思惟せらるゝ限りに於て」價值を具有する。此價值は Turgot は附言して云ふ、「商業上の價值とは寸毫の關係無く發生し得るものである」。換言すれば其は價格と異り孤立單獨の人間に對してすらも、交換と離れて存在するものである (Valeurs et Monnaies, Collection Guillaumin, Oeuvres de Turgot, tom. I, p. 80.)。即ち孤立人が其享樂に適合すと判断したる貨物を求むる時、其認知したる夫々の適合性は、Turgot に從へば、獨立に之を價值と稱して宜い。乍併此價值は斯く貨物各々に就きて單獨に成立し得れども、然も他物の價值と比較するにあらざれば之を秤量表現す

交換價值との區別は唯だ仄かなる暗示を存するのみにて未だ甚だ明瞭なりと云ふを得ず。Oue snay は “valeur d'usage” 及び “valeur venale” なる名辭の下に判然之を識別すと雖、然も前者研究の必要を無視して専ら考察を後者に限局した。吾人は Turgot に及んで始めて兩者の偏頗無き取遇を見る。彼の所謂「鑑賞價值」、「valeur estimative」並に「評定價值」、「valeur appreciative」是れである (Valeurs et Monnaies, Collection Guillaumin, Oeuvres de Turgot, tom. I, p. 72 et seq.)。蓋し其意を忖度するに使用價值を指して “estimative” と呼ぶ所以は、是れ其便益の熟知せらるゝ某々の物件に對して吾人各自の與ふる個々の鑑賞の成果たるが故にして、交換價值を稱して “appreciative” と爲す所以は、其が幾多の鑑賞相會し辯駁妥協の結果單一の決定的價格に融合するが故である (Turgot: La Valeur

る事不可能である。「鑑賞價值」則使用價值は此比較の結果二個以上の貨物の間に、尊重の順位を定め等級を立つるに依つて發生する觀念である。其は「人間が其欲求する種々なる貨物に對して附加する尊重の度合の發現である」(p. 80.)。而して Turgot の解釋に依れば孤立の人間が諸物の比較に際し考慮に加ふる事項は、第一に現在焦眉の欲望に對する適合性であつて、彼れは之を「卓越性」と呼ぶ。第二に將來の欲望に對する適合性、即ち現在の享樂には何等寄與する所無きも尙之を所持する事に依つて將來の享樂に供し得可き資質であつて、彼れは之を「效用」と呼ぶ。第三には獲得の難易であつて、彼れは之を稀少性と同一視する。蓋し「同等に有用にして同等に卓越せる二物の間に於ては、其獲得に一層の困難を要する方を一層貴重なりとし、其確保に一層の苦慮努力を拂ふ可きは明瞭であ